

第1章 景観特性と課題

I 長崎市の概況

1 長崎市の概況

<地勢>

長崎市は、九州の西端、長崎県の南部に位置し、長崎半島から西彼杵半島の一部を占めています。本市の西側、南側、東側は海に面し、角力灘、橘湾、大村湾が広がっています。

市街地としては、長崎港内港部の埋立地と港に注ぐ中島川の周辺や、浦上川沿いの南北に細く連なる比較的平坦な地域に、商業・業務機能が集積しています。平坦地が少ないため、周辺の斜面地の住宅地化により、住宅が丘陵をはうような独特の景観を呈するとともに、さらに住宅地は丘陵の外縁部に広がり、新しい市街地を形成しています。

平成17年、18年には30年ぶりとなる合併を行い、長崎半島や西彼杵半島の地域、伊王島や高島、池島などの島々が市域に加わりました。これらの地域は、多様な観光資源、史跡、文化に加え、豊かな自然に支えられた農業や水産業の資源にも恵まれています。

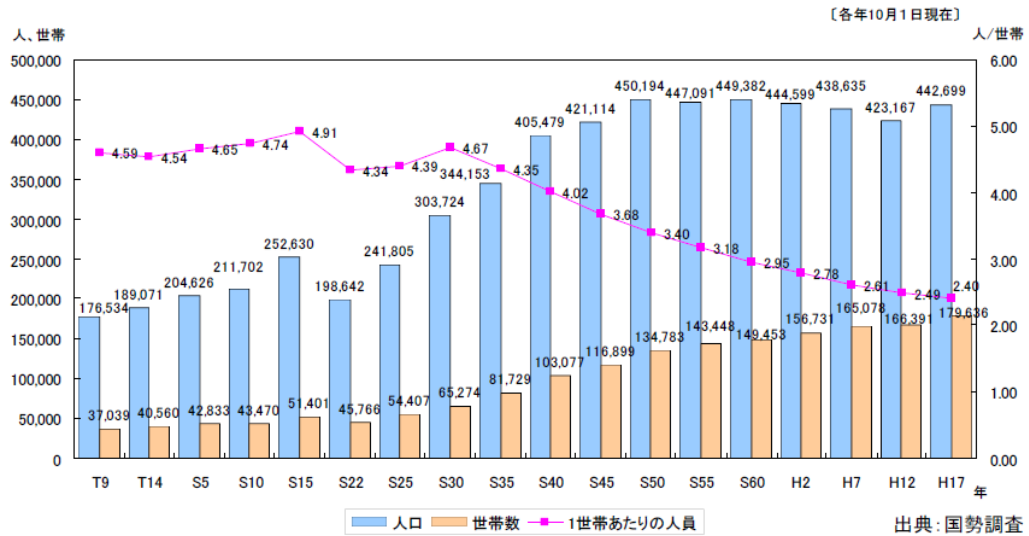
市域面積は、公有水面等の埋め立てと12次にわたる編入合併により拡張を続け、東西約42km、南北約46kmにおよぶ406.40km²に達しています（H21.10.1現在）。



■長崎市の位置

<人口>

長崎市の人口は、昭和20年の原子爆弾による被災以降、目覚ましい復興を遂げ、増加の一途を辿ってきましたが、昭和50年頃から横ばいとなり、近年は少子化等の影響もあり減少傾向にあります。一方、世帯数は、戦後の高度経済成長期以降の核家族化、近年では、若年、老年の単身者の増加等による一世帯あたりの人員の減少に伴って、増加傾向にあります。

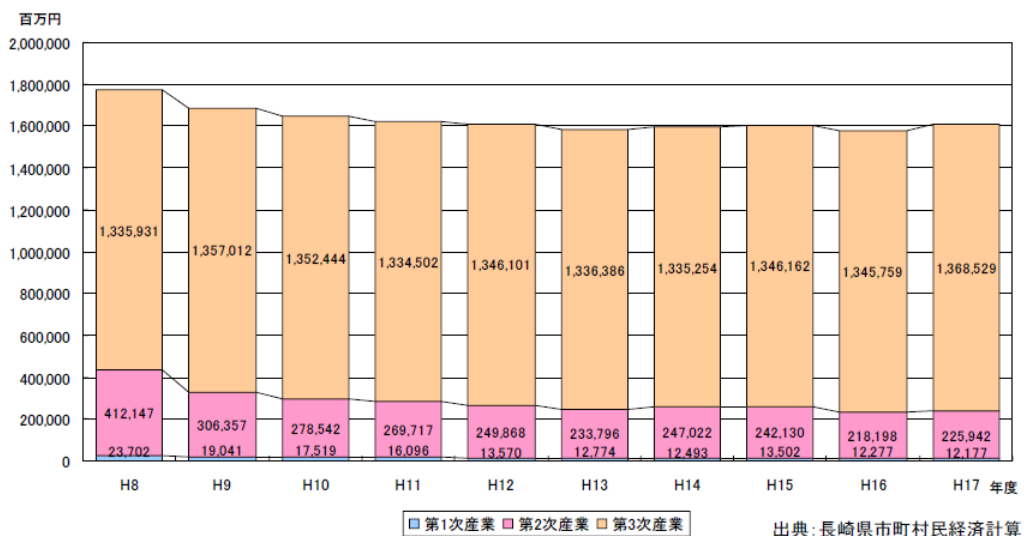


■人口、世帯及び1世帯あたりの人員の推移

<産業・経済>

長崎市の基幹産業である水産業や造船業等が、人件費の安価な新興国が台頭してきたことなどの要因により、第1次、第2次産業は低迷しています。一方、第3次産業は、市の総生産額の85%を超え、その依存度が拡大しています。

また、造船業等に対する外需が減少する中、内需中心の商業、サービス産業への移行が進んだことから、総生産額は、人口の減少とあいまって減少傾向にあります。

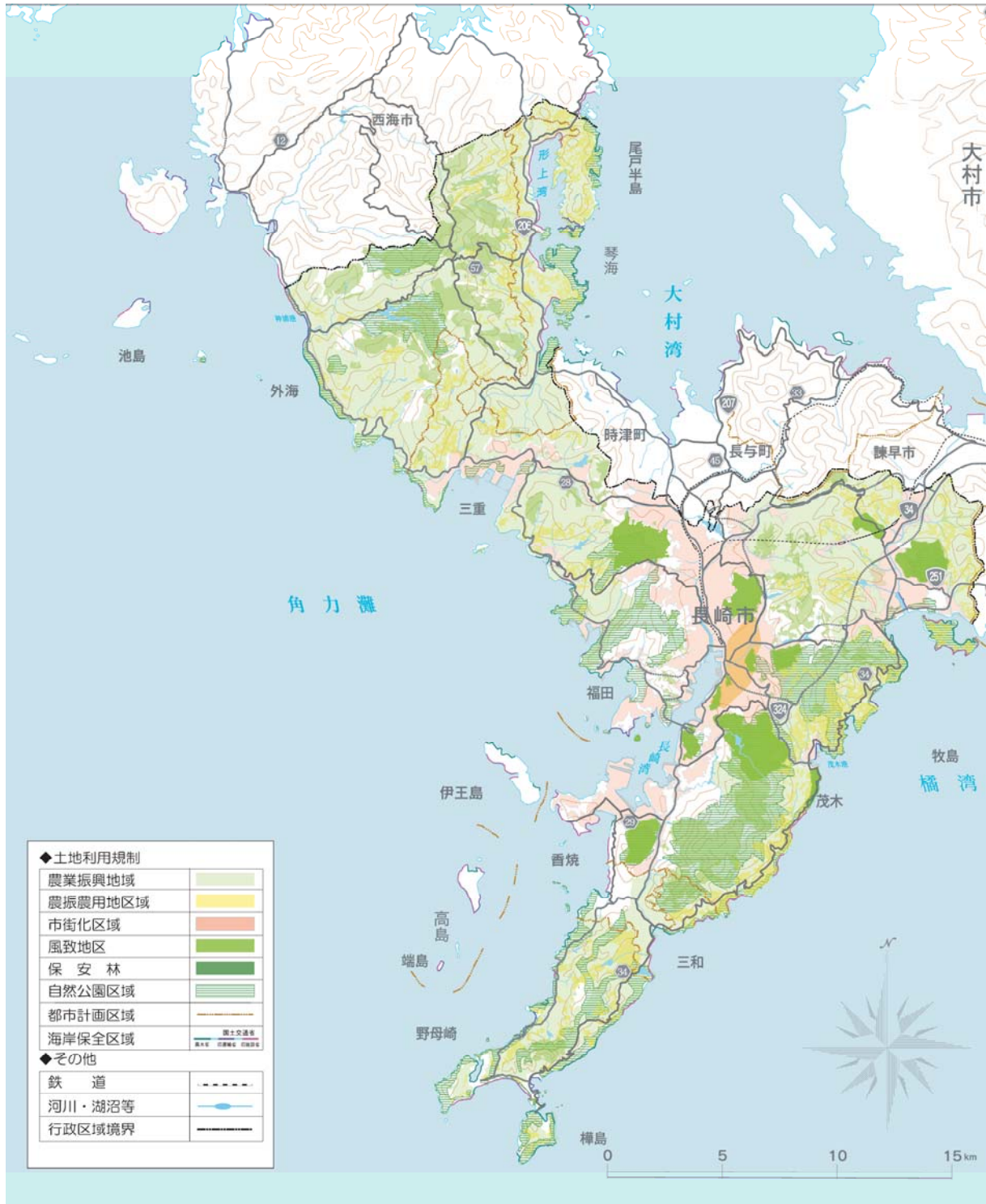


■産業別総生産額の推移

2 土地利用規制

市街地は長崎港をはじめとする港を中心として発達しており、主要な港に面する平地及び周辺の丘陵部が市街化区域に指定されています。また、市街化区域に近接する良好な緑地環境等が風致地区に指定されています。

市街地を取り巻く緑豊かな山間部や、リアス式海岸等の特異な地形・景観をもつ海岸部などは、広範囲にわたり保安林や自然公園に指定されています。



■土地利用規制図

II 長崎市の景観

1 景観構造

長崎市の景観を特徴付ける景観構造の要素は、地区のイメージや一体感をつくっている景観の領域、連続的な景観を形成する景観の軸と、中心的な場をつくっている景観の焦点、さらに、これらの場を多くの人々が視認することとなる眺望場所（視点場）があげられ、これらが重なりあって、私たちの目に映る景観が構成されています。

<景観の領域>

長崎市では、市域の背骨を通るように山稜が位置し、標高 590m の八郎岳を最高峰とする 300m から 400m 級の山々が連なっています。これらの山々は海まで迫り、深く入り込んだ海と急峻で平坦地の少ない地形を形づくっています。このため、角力灘、大村湾、橘湾の 3 つの海に面する長い海岸線と、山稜や丘陵地により、景観の領域が形成されています。

山地や丘陵地に囲まれた狭隘な平坦地を中心に、市街地や農地などの多様な景観が形成されています。特に、長崎港を核とする市街地は、長崎県における中心的な都市機能が集積し、中高層建築物が多く立地する中心市街地となっています。

そして、市内各地に、長い歴史の中で多様な文化が重なり合い強い歴史性を有している場所があります。このような場所は、観光地となっている所も多く、長崎市の景観を特徴づける要素となっています。

<景観の軸>

連続的な景観を形成する景観軸として、海岸による海岸軸、主要な河川による河川軸、主要な幹線道路による道路軸があげられます。

長崎市は長い海岸線を有しており、海岸軸は半島や島々を取り巻く形で形成されています。一方、起伏の多い複雑な地形のため多くの河川は短小ですが、市街地の中心部に主要な河川が位置し、河川軸を形成しています。

また、主要な幹線道路が中心市街地から市内の各地を結ぶように整備されており、道路軸が中心部から周縁部に向けて放射状に広がっています。

<景観の焦点>

中心的な場所として、ランドマーク、結節点、交流の場を「焦点」と位置つけます。

稲佐山や風頭山など市内に点在する主要な山々や、海上に点在する島々は、古くから地域のシンボルとして認識され、多くの場所から視認されるランドマークとなっています。

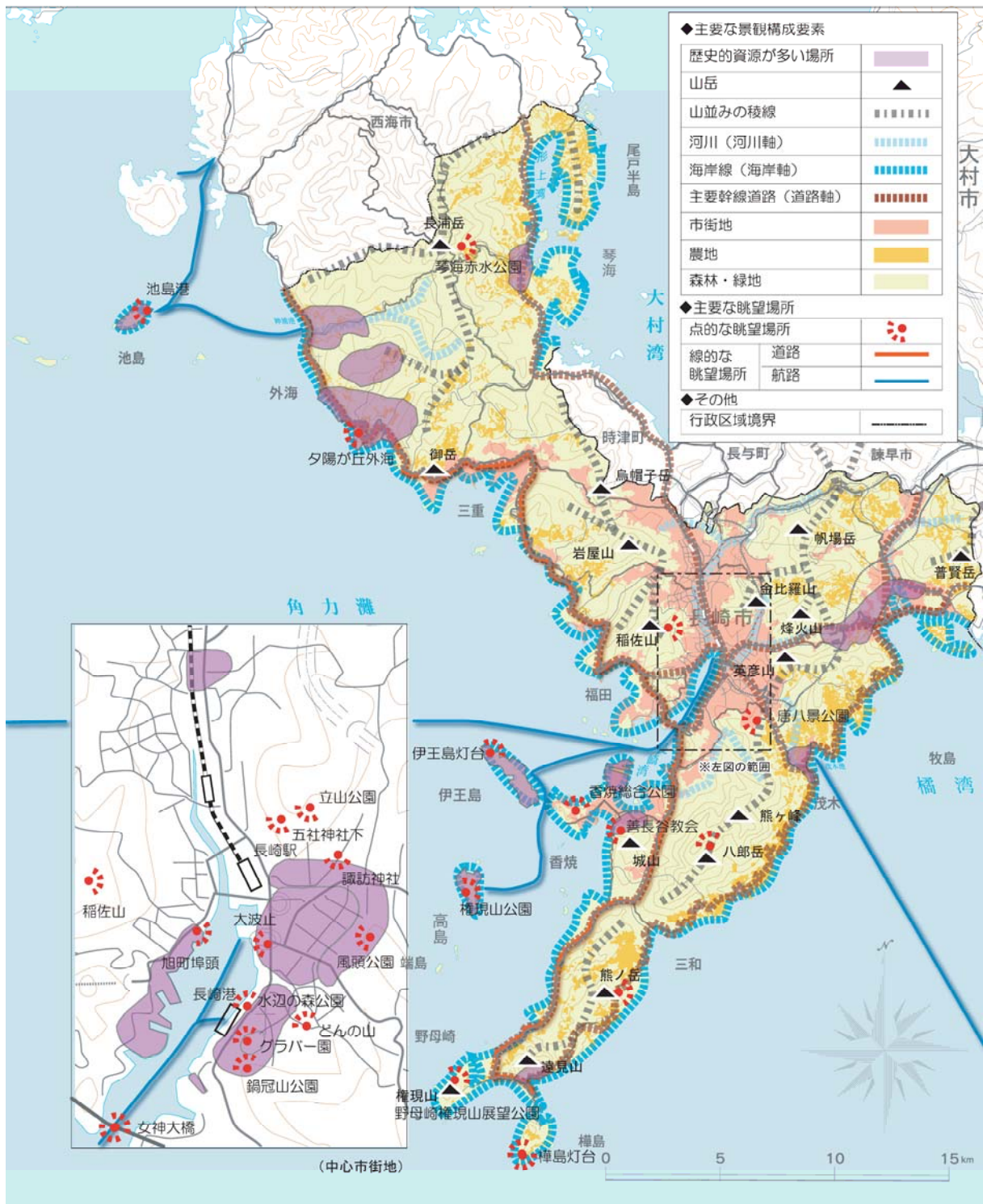
また、JR 長崎本線の終着駅である長崎駅や、航路の起終点である長崎港ターミナルや島々の港といった日々多くの人々が行き交う交通の結節点は、長崎への入口であり、多くの人に印象付けられている場を形成しています。

このほか、海外との交流や町建ての歴史を感じさせる景観やそれらを受け継ぐ四季を通じた祭りや行事などの文化的な景観を見ることができます。

<眺望場所（視点場）>

長崎市は、市街地の周囲に丘陵地や山地が迫っているため、高台に整備された公園等は、市街地や海などを広く見渡すことのできる視点場（眺望場所）となっています。また、リアス式海岸であるために湾が多く、海を介して対岸を一望できる場所もあります。

このほか、日本風景街道にも指定されている「ながさきサンセットオーシャンロード」や航路上には眺望のすぐれた場所が多く、自動車や船などで移動しながら、長崎市の多様な景観を眺望することができます。



■景観構造

2 景観の分類

「景観の領域」「景観の軸」「景観の焦点」「眺望場所」といった長崎市の景観構造は、長崎の特徴的な地形や地質、気候等の自然条件と、地域の社会活動や歴史・文化が相互に作用しあって形成されており、多様で複雑な様相を呈しています。ここでは、長崎市の景観を、景観構造と関連付けて「自然」、「社会」、「歴史」及びそれらの「複合性」といった四つの観点から整理します。

分類	種別	景観構造			
		景観の領域	景観の軸	景観の焦点	眺望場所
自然景観	多様な表情を見せる海岸の景観	★			
	海原と島影が織り成す景観	★		★	
	延長が短く急勾配の河川		★		
	海に迫った山々の景観			★	
社会景観	山や海に囲まれた集落と生業の景観	★			
	港を中心に発展してきた都市の景観	★			
	放射状に発達した陸・海の交通網		★		
	斜面を利用した住宅地の景観	★			
	人と物とが交錯するまちなかの景観	★			
	四季を彩る祭りや行事の景観			★	
歴史景観	海外交流の歴史を感じさせる景観	★		★	
	街道の発達とまちの形成	★	★		
	キリスト教の伝来とその影響	★			
	町建ての歴史を感じさせる景観	★			
	近代化の歴史が偲ばれる産業遺構の景観	★		★	
	国際平和都市を象徴する景観	★		★	
	長崎大水害の影響	★			
複合景観	急峻な地形と深く入り込んだ湾や港が生み出す多様な眺望景観	★			★
	放射状に発達した陸・海の交通網からの移動景観		★		★
	中心市街地の夕景・夜景	★			★

(1)自然景観

多様な表情を見せる海岸の景観

長崎市は三方を海に囲まれ、長い海岸線を有しています。長い海岸線では砂浜や円礫浜、リアス式海岸、断崖などの表情豊かな海岸の景観を見ることができます。海岸沿いには奇岩も多く、以下宿の夫婦岩や黒浜の網掛岩、茂木の立岩などが知られています。



■川原の円礫浜



■脇岬の砂浜



■以下宿の夫婦岩



■茂木の立岩

海原と島影が織り成す景観

長崎の海沿いや高台からは、いたるところで広々とした海原の景観を見ることができます。特に西側海岸は、母子島や神楽島、端島などの島々が点在し、夕日に照らし出された島影などの特徴的で魅力的な景観が見られます。



■深堀三和線からの高島・端島

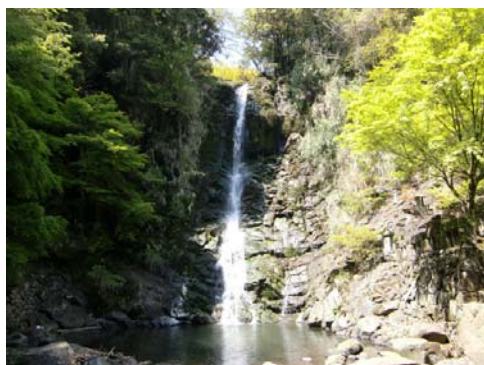


■角力灘の夕日（大角力、小角力、母子島）

延長が短く急勾配の河川

急峻な地形を背景に、本市のほとんどの河川は延長が短く急勾配です。そして下流部では、急激に勾配が緩やかになり、狭いながらも堆積平野を形成し、市街地や集落が形成され、その中ほどまで潮の満ち引きが見られます。宮崎地区の川原大池は、ラグーンが発達したもので、一帯は樹林に覆われ、昆虫や野鳥など自然が豊富な場所です。また、ホテルが見られるような自然豊かな河川が多くあります。

※ラグーン：湾が砂州によって外海から隔てられ湖沼化した地形



■滝の観音（間の瀬川）



■川原大池（ラグーン）

海に迫った山々の景観

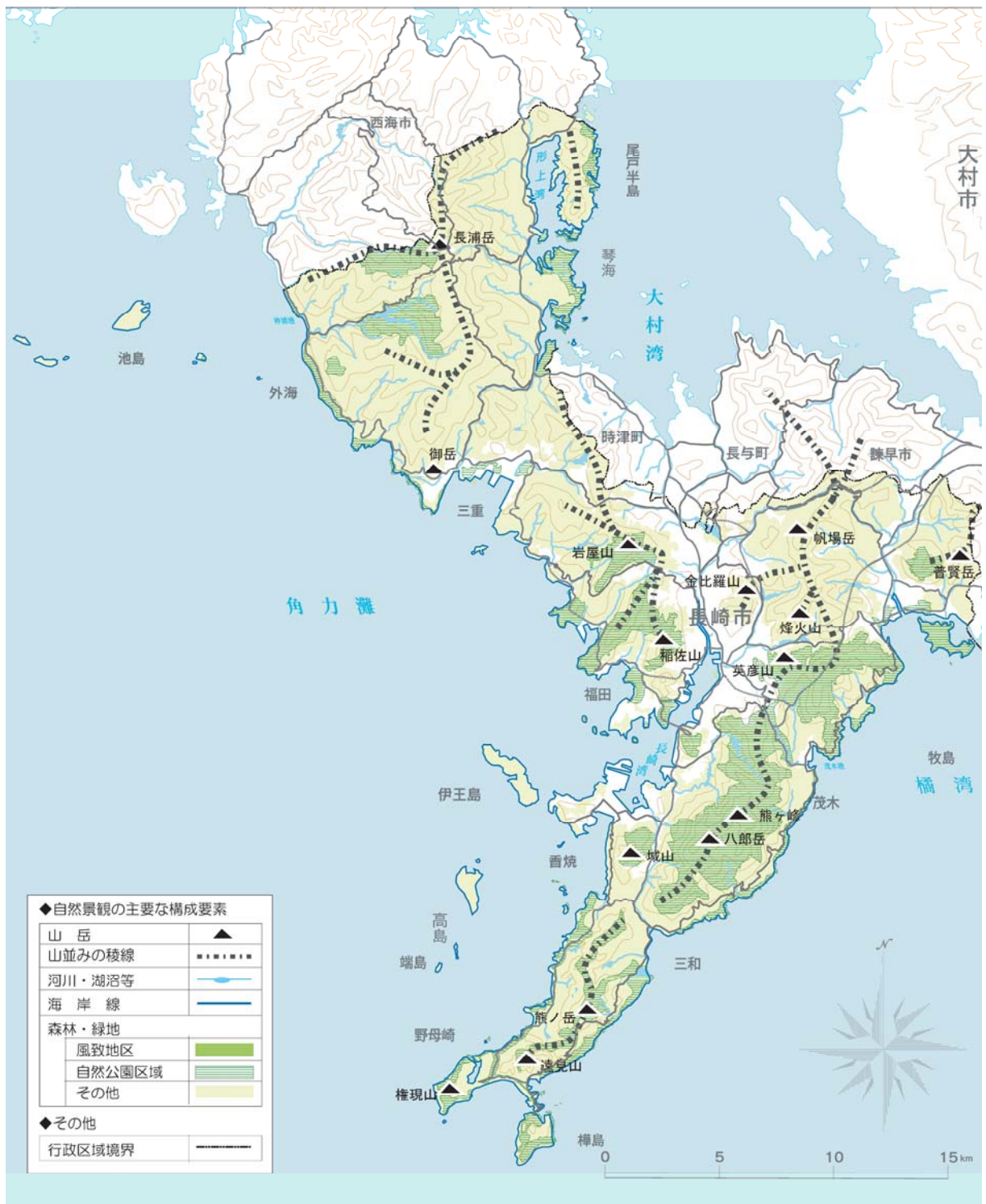
細長い半島の中央を、馬の背のような山地が縦貫し、標高 590mの八郎岳を最高峰とする300mから 400m級の起伏に富んだ山々が海に迫っています。長崎市は全体が温暖帯南部に属するため、スダジイ林、アカガシ林やヤブツバキなどの冬でも葉を落とさず一年中緑色をしている常緑広葉樹のおいしげる照葉樹林が発達しています。また、林業が行われているところでは、スギやヒノキの人工林が広がっています。市域の大部分が山林に覆われていることから、緑豊かな印象を与えています。



■照葉樹林（三和）



■照葉樹林（野母崎）



■自然景観総括図

(2) 社会景観

山や海に囲まれた集落と生業の景観

長崎市は、リアス式海岸が発達し、急な斜面が海に迫るなど独特の地形を有しています。リアス式海岸の入り江を活かした漁港を中心とする集落や斜面を利用した棚田や段々畑といった生業の景観が広がっています。地域の自然を活かし、長い歴史の中で培われてきた産業として、茂木のビワや長浦のスイカ、大村湾の真珠、近海で取れるアジやボラの加工品など多くの特産物を生み出してきました。近年は、野菜や花き果樹などの施設栽培も発達しています。

このような各地の産業は、景観に多様性を与え個性豊かな景観をつくりだしています。



■ 茂木港



■ 大村湾の真珠養殖場



■ 大中尾の棚田



■ 茂木のビワ畑



■ 宮崎のハウス枇杷



■ 琴海のスイカ栽培

港を中心に発展してきた都市の景観

港湾は、「経済活動を支える海外との貿易」「離島の暮らしに不可欠な生活物資の安定供給」「通勤・通学・観光などにおける海上交通」など市民生活に重要な役割を担っています。特に長崎市は港を中心に発展した都市で、造船所の巨大なクレーンと行き交う船舶が、ともに賑わいのある港湾の景観を醸し出しています。



■造船の歴史を物語る巨大なクレーン



■大型観光船

放射状に発達した陸・海の交通網

幹線道路は、中心市街地を中心に放射状に整備され、福岡方面等とは鉄道や高速道路等により結ばれ、観光客を始め来街者の主要な足となっています。一方、航路は、長崎港を中心に、五島列島や天草諸島、周囲の島々等を結んでいます。これらの交通網は、各地を結ぶ人や物の交流の要として大きな役割を担い、都市の骨格を形づくり、そこから陸海の多様な移動景観が見られます。



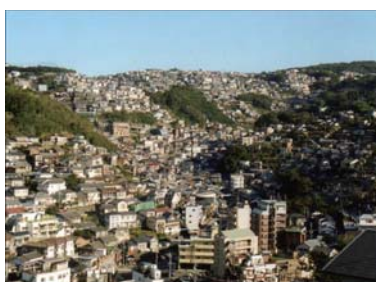
■陸の玄関口（長崎駅）



■海の玄関口（大波止ターミナル）

斜面を利用した住宅地の景観

長崎市では平坦地が少ないことから、斜面地にまで住宅が建設されています。特に中心市街地では山頂近くまで高密度に住宅が建ち並び独特の斜面市街地が形成され、「坂の町長崎」といわれる特異な景観をつくり出しています。斜面市街地は、日照、通風、採光、眺望など斜面特有のメリットを有するものの、救急活動が困難など生活する上での課題を有しています。



■山頂近くまで達する斜面住宅



■狭い路地

人と物が交錯するまちなかの景観

県都である長崎市の中心市街地では都市機能が集中し、中高層建築物が建ち並ぶ都市的な景観が見られます。また、公共交通としてバスやタクシーだけでなく、路面電車がまちを走り、人と物が行き交う賑わいのある景観が見られます。そして、隣接する港と一体となって特徴あるまちなかの景観をつくりだしています。



■中高層建築物が建ち並ぶまちなか



■中心市街地を走る路面電車

四季を彩る祭りや行事の景観

長崎市では四季を通じて様々な祭りや行事が行われています。中心市街地では「長崎くんち」や「ハタ揚げ」、「ペーロン」、「精霊流し」、「ランタンフェスティバル」など、また、合併地域では、「野母浦祭り」、「神浦神社大祭」など、豊かな歴史を受け継ぐ祭りや行事の文化的な景観を見ることができます。



■長崎くんち



■ペーロン



■野母浦まつり



■神浦神社大祭



■社会景観総括図

(3) 歴史景観

海外交流の歴史を感じさせる景観

天然の良港であった長崎港周辺では、長崎開港以前から各地に外国船の来航があったことが知られていますが、特に 1571 年（元亀 2 年）ポルトガル船の入港以来、長崎港は海外貿易港として発展しました。江戸時代に入り海外交易の制限により、中国・オランダとの交易は長崎のみに限定され、オランダ商館が置かれた出島は、安政の開国までの 200 有余年、我が国唯一の西欧文化の受け入れ口の役割を果たし、我が国の近代化に大きく貢献しました。また、唐人屋敷や唐寺などに象徴されるように、中国と盛んな交易が行われました。このように、長崎が海外貿易港として特権的地位を有することになり、港内外の監視・防衛の目的で番所や台場、遠見番所などが設置され、現在もその遺構が残されています。

1858 年（安政 5 年）の五ヶ国修好通商条約締結による開国に伴い、翌 1859 年（安政 6 年）新しく自由貿易港として再出発することになり、大浦一帯は外国人居留地として造成され、多くの外国人が居住し、貿易をはじめさまざまな商業活動を展開しました。東山手地区・南山手地区には、現在も大浦天主堂や旧グラバー住宅など多くの洋風建築物が保存され、異国情緒を感じさせる景観を醸しています。



■正保四年南蛮船渡来二付諸侯布陣長崎港図
(資料：九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門所蔵)



■出島

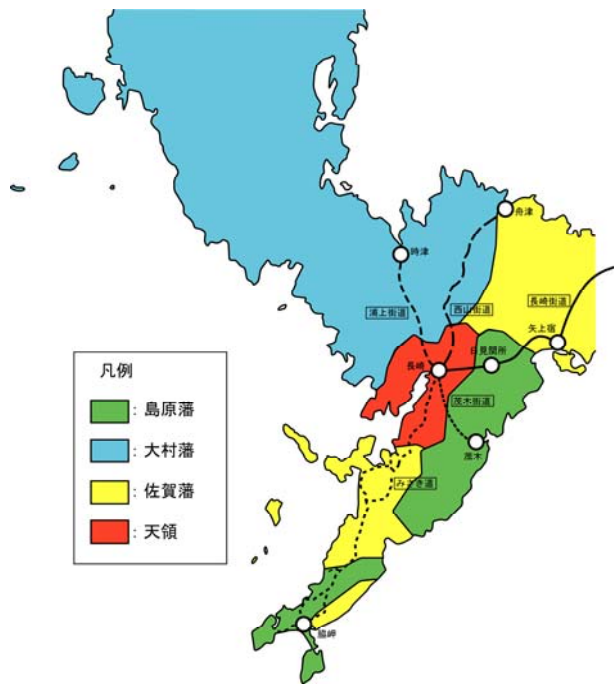


■東山手・南山手の旧外国人居留地

街道の発達とまちの形成

江戸時代には、長崎街道、浦上街道、西山街道、茂木街道、みさき道の五つの街道が整備され、これらの街道は、人と物の交流を生み出し、沿道にはまちや集落が形成されるなど、現在の長崎市の骨格をつくる基盤となりました。

往時の名残を留める東長崎地区の矢上宿、矢上神社、本陣跡、役屋敷跡やかつて旅館街で栄えた茂木街道沿い、佐賀藩深堀領の鍋島家城下町跡として中世・近世の地割り、掘割り、藩港が残る深堀地区、江戸期には、中国との交流もあり、長崎から観音寺まで7里のみさき道を通して参拝する人で賑わった観音寺など現在の地域の個性を生み出しています。



■近世の街道と藩領域（1664年）



■旧長崎街道



■深堀の武家屋敷跡



■みさき道



■長崎街道すじの旧諫早領役屋敷跡（矢上町）

キリスト教の伝来とその影響

長崎は、キリスト教が伝来して以来、布教活動やキリシタン文化発展の役割を担い、禁教による弾圧とその後 250 年にわたる潜伏を経て復活に至るまでの我が国のキリスト教の歴史を語る上でも欠くことのできない重要な地域です。現在、その歴史を物語る数多くの文化遺産があります。

1597 年（慶長 2 年）、フランシスコ会宣教師やイエズス会員、日本人キリシタンの計 26 名が処刑された日本二十六聖人殉教地は、現在、カトリック教徒の公式巡礼地として国際的にもよく知られています。また、この二十六聖人に捧げられた教会堂である大浦天主堂は、浦上の潜伏キリシタンが信仰の告白をした劇的な「信徒発見」の舞台にもなった場所で国内現存最古の教会堂建築です。そのほか、布教活動や福祉・慈善活動に尽力したド・ロ神父が手掛けた旧出津救助院や出津教会、大野教会堂などがあり、外国人神父が伝えた西洋の建築技術と日本の伝統的な建築技術との融合した質の高い造形意匠を見ることができます。現在「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」として世界遺産への登録に向けた取組みが進められています。



■日本二十六聖人殉教地



■大浦天主堂



■浦上天主堂



■神の島教会



■出津教会



■大野教会堂

町建ての歴史を感じさせる景観

県庁から市役所間の通りの外側に残る石垣群は、長崎のかつての町の形成過程を物語る貴重な歴史的遺構であり、江戸、明治、近代の3世代の歴史を今日に伝え、都市景観に風格を与えています。

中島川周辺や寺町、丸山地区には、町家、商家、料亭、邸宅などの建築物が数多く見られます。丸山地区の旧遊郭のエリアには、旧遊郭の入口にある福砂屋や、花街の名残りが感じられる花月・青柳・検番など優れた意匠の建築物が多く残されています。また、諏訪神社を要に、長崎のまちを取り囲むように、山裾に唐寺を含む寺社群が連続しており、閑静で風格ある雰囲気を呈しています。



■大音寺坂の石垣



■梅園通りと花月裏門

近代化の歴史が偲ばれる産業遺構の景観

長崎市は、1855年（安政2年）に設立された「海軍伝習所」や1861年（文久元年）の「長崎熔鉄所」設立という変遷を経て、後に三菱社による事業の拡大が図られ、造船業を主要産業として自然の良港を活かし発展してきました。

一方、幕末から明治期に発展した洋式採炭技術をいち早く取り入れ、石炭の増産体制が確立することで、国内産業への供給はもちろんのこと、蒸気船の燃料としても大きな役割を担い、東アジア地域における海運網を支えました。炭鉱は、1868年（慶応4年）に鍋島直正が英人トーマス・グラバーと共同経営で洋式採掘を始めた高島炭鉱、1870年（明治3年）に採掘が始められた端島炭鉱（軍艦島）、さらに昭和に入って伊王島、池島などが代表的です。現在では炭鉱は全て閉山し、造船施設も最新の設備が導入されていますが、長崎港、端島、高島など、各地で近代化の歴史が偲ばれる産業遺構は、「九州・山口の近代化産業遺産群」として世界遺産への登録に向けた取組みが進められています。



■小菅修船場跡



■端島（軍艦島）

国際平和都市を象徴する景観

1937年（昭和12年）に日華事変が勃発し、1941年（昭和16年）第2次世界大戦に突入した後、1945年（昭和20年）8月9日に長崎市に原子爆弾が投下されました。7万人以上にものぼる尊い犠牲をだした原爆にまつわる痛ましい傷跡、そして、その深い傷跡から再び立ち上がった長崎市は、国際平和都市として平和を訴えつづけています。今なお浦上地区を中心に点在している被爆遺構や、「平和は長崎から」のスローガンのもとに、市民や国内各地、諸外国から浄財を集め、1955年（昭和30年）8月に完成した平和祈念像、そして平和公園は、このような歴史をもつ平和のシンボルです。



■ 平和公園



■ 被爆遺構の山王神社旧二の鳥居

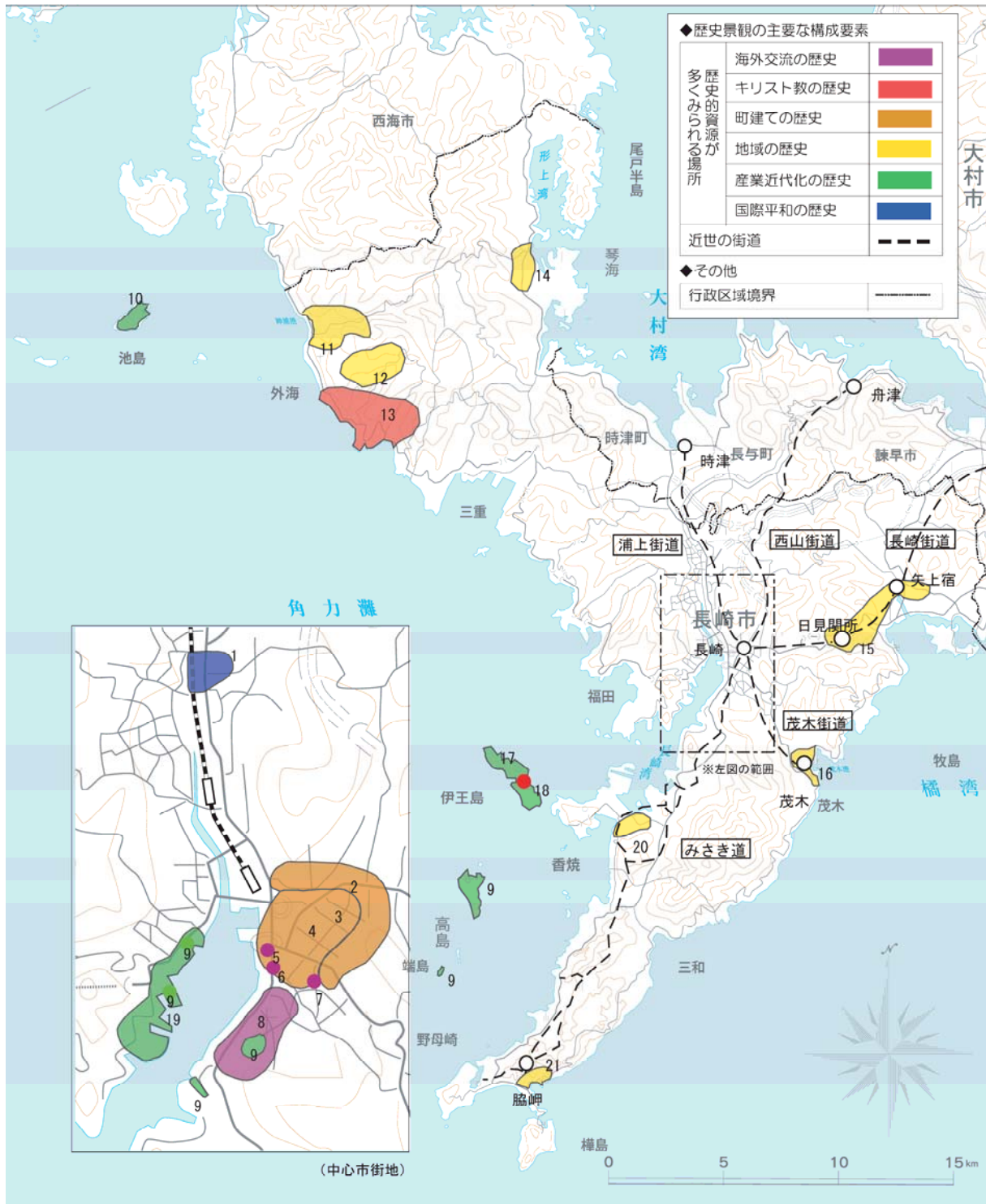
長崎大水害の影響

1982年（昭和57年）7月23日、長崎市は集中豪雨によって、明治以降の歴史上最大の災害に見舞われました。この日、夕刻から降り始めた雨は、5時間で353.5ミリという未曾有の降水量を記録し、増水した濁流や鉄砲水により、市内の平地はほとんど水浸しになり、多くの石橋が流失し、周辺部では山崩れによる家屋倒壊が相次ぎました。

この自然の脅威を教訓として、長崎市の防災都市づくりは急速に進められています。しかし、この際、河川や斜面地では、大水害以前にみられたような自然的な景観が失われてきました。



■ かろうじて濁流に耐えた眼鏡橋
(資料：「189長崎市制施行100周年」
平成元年4月 長崎市総務部広報課)



1 平和公園・原爆落下中心地と被爆遺構	9 近代化産業遺産群	17 西洋式灯台
2 諏訪神社を要とした寺社群・中国寺院群のまちなみ	10 池島の炭鉱跡	18 禁教令後の信仰を受け継いだ伊王島・沖之島の教会
3 町家建築群とくんち祭礼	11 神浦城址と河口港のまちなみ	19 近代産業
4 内町・外町期の町建ての遺構	12 石積み家屋のある集落	20 深堀武家屋敷のまちなみ
5 中島川河口と銅座川周辺の都市内水辺	13 ドロ神父ゆかりの教会関連施設	21 観音寺みさき道、脇岬
6 鎖国期の出島・唐人屋敷	14 自証寺と石積み集落	
7 旧丸山遊郭の料亭・検番・石畳のまちなみ	15 長崎街道と宿場、日見峠	
8 開国期の大浦・東山手・南山手の居留地	16 茂木のまちなみ	

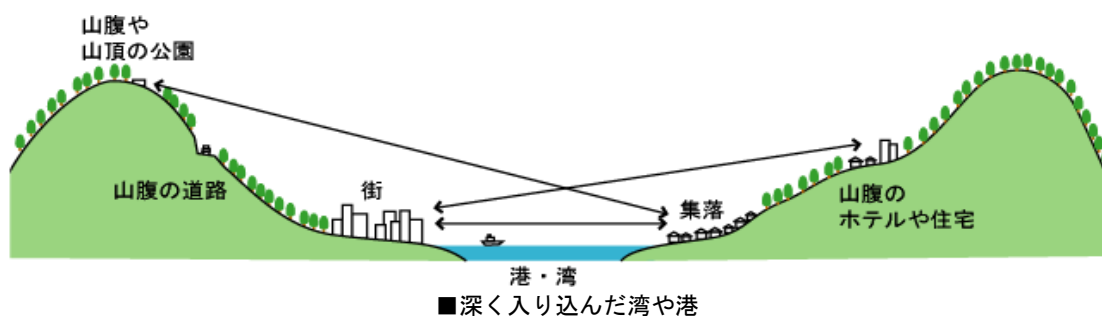
■ 歴史景観総括図及び総括表

(4) 複合景観

急峻な地形と深く入り込んだ湾や港が生み出す多様な眺望景観

長崎市では、市域の背骨を通るように山稜が位置し、標高 590m の八郎岳を最高峰とする 300m から 400m 級の山々が連なっています。これらの山々は海まで迫り、急峻で平坦地の少ない地形的特徴を形づくっています。このため、山からの見下ろしや、山を仰ぎ見る場所などに事欠かず、長崎市の地形は多くの見る・見られる関係をつくり出しています。

長崎港や橘湾、野母崎港など湾やリアス式地形を生かした港が多く、また、大村湾という内湾を有するという地形的な特徴により、いたるところから対岸景を望むことができます。



■山と海に囲まれた集落（野母崎）



■海を背景に広がる集落（琴海赤水公園）



■海を介して仰ぎ見る山とまち（橘湾）



■港と一体となった市街地（長崎港）

放射状に発達した陸・海の交通網からの移動景観

長崎の特徴である長い海岸線に沿った幹線道路では、角力灘の島々や沈む夕日、橘湾から昇る朝日など、場所や時刻によって様々な景観が見られます。また、長崎港を中心に発達した航路では、長崎港を囲む中心市街地のすり鉢状の地形や造船所などの産業景観、自然豊かなリアス式海岸など、海岸の独特な眺望景観があります。



■ 幹線道路から海への眺望（外海）



■ 航路上から仰ぎ見る山やまち（長崎港）

中心市街地の夕景・夜景

中心市街地では、すり鉢状に山に囲まれた長崎港を中心にまちが広がり、港と都市が一体となった都市構造となっています。稲佐山など長崎港を取り巻く眺望場所からは、長崎港を中心とした市街地を一望するパノラマの夕景や夜景を見ることができます。



■ 海をとり囲むまちと山（稲佐山へ沈む夕陽）



■ 海をとり囲むまちと山（長崎港口の夕景）



■ 昼間と異なる表情の長崎港の夜景（稲佐山）



■ 昼間と異なる表情の長崎港の夜景（銅冠山）



■複合景観総括図

Ⅲ 景観に関する市民の意識

平成 21 年 9 月に市民を対象とした景観に関するアンケートを実施したところ、840 人（調査対象 3,000 人、回収率 28%）の方から、回答をいただきました。

景観への関心などについて

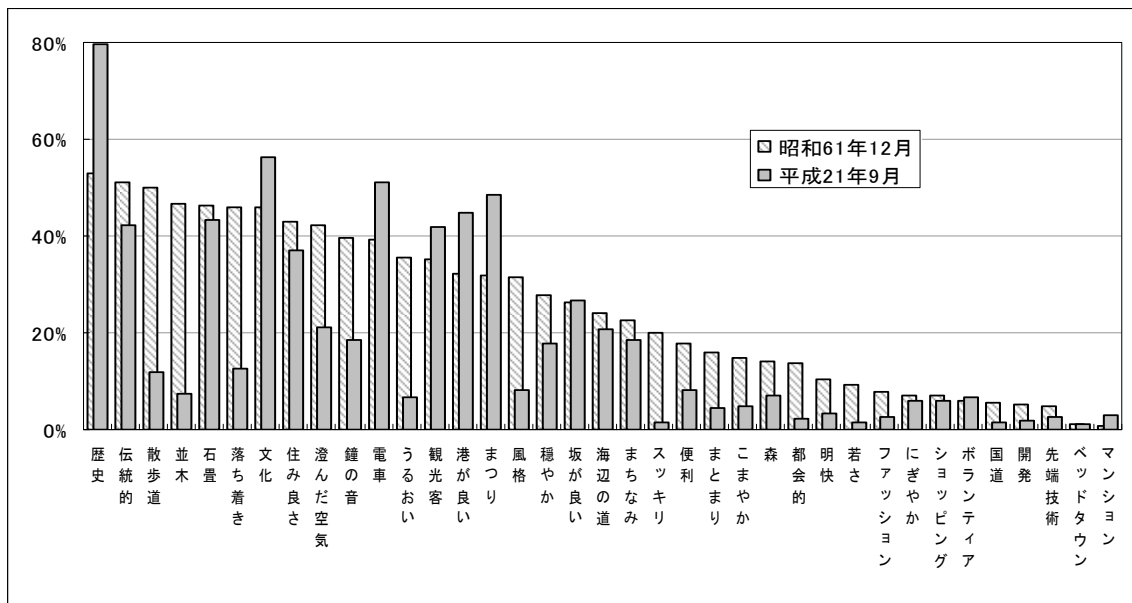
長崎のまちなみや自然の景観について関心を持っているか伺ったところ、90%程度の方が景観に関心を持っていると回答しています。

景観についての関心	回答数	% (全体)	% (除無回答)
非常に関心がある	226	(27%)	(27%)
ある程度関心がある	517	(62%)	(62%)
あまり関心がない	82	(10%)	(10%)
全く関心がない	4	(0%)	(0%)
無回答	11	(1%)	-
合計	840	(100%)	(100%)

長崎の将来イメージ

「長崎市の将来イメージとして連想する言葉」として、「歴史 (80%)」と「文化 (56%)」が最も多く回答され、また、歴史・文化と関連する「教会」、「まつり」、「石畳」といった項目が多く選ばれています。この他、「海」に関する項目、「電車」、「食」、「観光客」の回答が多い結果となりました。

昭和 61 年 12 月に実施した同様のアンケート調査結果と比較すると、「歴史」、「文化」、「港」、「電車」、「まつり」といった項目への回答がより集中していることから、これらのイメージが、以前に増して鮮明になってきていることが伺えます。



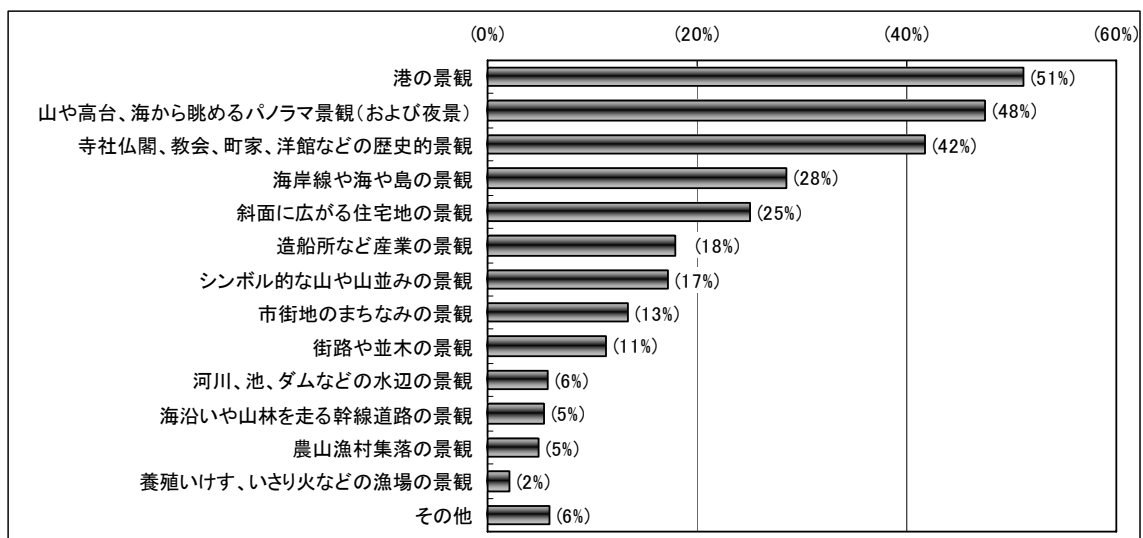
将来イメージ(昭和 61 年 12 月と平成 21 年 9 月の比較)

良好な景観と景観を損ねている要因

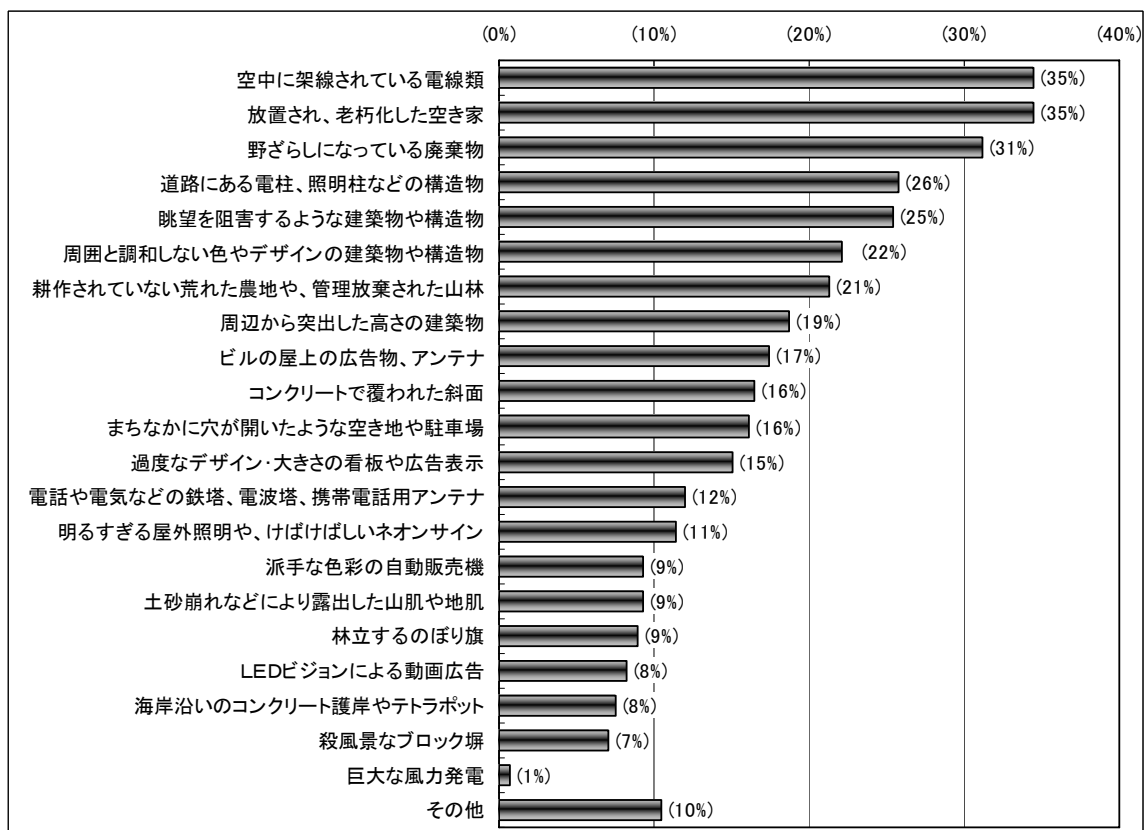
「長崎市の誇れるすばらしい景観」として、「港の景観（51%）」、「山や高台、海から眺めるパノラマ景観（および夜景）（48%）」、「寺社仏閣、教会、町屋、洋館など歴史的景観（42%）」に回答が集中しました。

一方、「景観を損ねている要因」として、電線類、空き家、廃棄物が最も重視され、次いで、電柱や照明柱などの構造物、眺望を阻害するような建築物や構造物への問題意識が高い結果となりました。

【長崎市の誇れるすばらしい景観】



【景観を損ねている要因】



IV 景観形成上の課題

長崎市の景観の現状を踏まえ、景観形成上の課題を整理します。

1. 本市の魅力をさらに高めるための課題

地域イメージを大切にした景観づくり

長崎市には、豊かな自然と積み重ねられてきた歴史を背景に、特徴的な景観資源を有する地域が数多く存在します。また、豊かな歴史を受け継ぐ様々な祭りが開催されており、まちの景観に四季折々の表情を与えています。しかし、地域を特徴づけている景観資源は、価値があるにも拘わらず日々の生活の中に埋もれてしまっていることもあります。

特徴ある景観資源を有する地域では、それらの価値を市民と共有し、それらを活かした景観づくりを進める必要があります。

眺望を意識した景観づくり

長崎市には地形的な特徴から、自然豊かな眺望やまちを見下ろす眺望、ランドマークや物語を印象付ける眺望など多くの眺望場所がありますが、周辺に調和しない建物が建てられるなど、すばらしい眺望を活かされていないところがあります。また、市民の意識調査において、「景観を損ねている要因」として、電線類、空き家、廃棄物が最も重視され、眺望を阻害するような建築物や構造物への問題意識が高い結果となっています。

長崎市の景観的な特徴を活かしていくためにも、眺望の重要性を市民と共に広く認識し、良好な眺望場所の整備やそこからの眺望景観を守るための対策を行う必要があります。

まちを歩いて楽しむ観点への配慮

長崎市は、市内の所々に、多様な歴史や文化を感じさせる資源が渾然一体となって分布しており、一種独特な雰囲気呈しています。

これらの資源を結び、まちを歩いて楽しむ魅力を引き出すため、行政と市民が一体となって各地の地域資源をわかりやすく巡ることができるルートづくりや資源の活用に取り組むことが大切です。

2. 良好な景観を守り、育むための課題

活力ある市街地の景観づくり

長崎市の中心部では、郊外への大型店舗の進出により空き店舗が目立ち、空き地がコインパーキングなどとして利用されることで、商店街の賑わいやまちなみの連続性が無くなっています。また、斜面地の住宅地では、人口減少に伴う老朽化した空き家の増加により、火災などによる周辺住宅地の危険性が増すとともに地域の活力低下にもつながっています。一方、長崎駅周辺では、日本西端の鉄道の終着駅として新たなまちづくりが進められています。

市民が誇りに思い、自慢できるまちを形成していくためにも、このような市街地を再生し、活力ある市街地の景観づくりを行う必要があります。

市街地での緑化の推進

長崎市の市街地では、高密度に建物が建設されるとともに、斜面地が多いことから平坦地に比べて建物が目立ちやすく、さらに擁壁やのり面が多くなり、人工的な印象が強くなりがちです。

緑地は人工的な印象を和らげ、まちに潤いを与える効果を有しており、斜面地の多い長崎市の市街地の景観づくりにあたっては重要な役割を果たしています。民有地の緑化、のり面緑化や屋上緑化など、緑地を増やすための取組みが必要です。

大規模な公共事業における景観配慮

地形が急峻で平坦地が少ない長崎市の場合、道路の建設や防災事業に伴うコンクリートののり面やのり枠等は、巨大になりがちで景観に大きな影響を与えています。また、規模の大きな建築物の建設等についても同様であり、色彩や形態によっては、周辺景観との調和を欠いているケースも見られます。

公共事業は、地域の景観づくりを先導していくべきであり、計画段階から景観への配慮やチェックできる仕組みづくりが必要です。

自然景観保全のための対策

海や山といった豊かな自然が身近に感じられるところが長崎市の一つの特徴ですが、この身近な守るべき自然が、各種開発等により失われているところがあります。

守るべき自然については、その重要性を市民と共有し、適切に保全していくことが必要です。

農地景観保全のための対策

長崎市には、棚田や段々畑等の美しい農地が残されているところもありますが、農業従事者の高齢化や担い手不足等により耕作放棄地が増加するなど、農地の景観が変化しつつあるところもあります。

守るべき美しい農地については、その重要性を市民と共有し、後継者問題も含め適切な対策が必要です。

3. 景観形成の取組みを進めるための課題

住民との協働による景観づくり

景観は、道路・建造物・緑など目に入るあらゆるものの総体として形成されています。このため、個人の建物や屋外広告物などであっても、周囲の景観と比べて目立ちすぎたり、突出した印象を与えるなど、景観的な調和を乱している場合があります。

今日みられる景観は、市民・民間事業者・行政といった、まちに関わる全ての人がつくってきたものであり、また、まちのイメージや文化を表すものであるという意味で、景観は極めて公共性が高く、市民共有の財産ともいうべきものです。

今後、長崎らしさのあるよりよい景観をつくっていくためには、市民や民間事業者が景観面からのまちづくりに主体的に参加し、行政と一緒に地域での景観を考え、協働して取り組んでいくことが求められています。